

「宗門十規論」の教訓

長 嶋 孝 行

宗密の名著といわれる「禪源諸詮集都序」（八三〇年代）の時代から、約一世紀過ぎた時代に、法眼文益（885～938）が「宗門十規論」を著わして、禪門五家の内、第五家目の宗派、法眼宗を出現させて歴史的にはすべて出揃う。「都序」の書かれた時代には、宗密が記しているように、

今集所述殆且百家。宗義別者猶將十室。

百家になろうとし主な宗義なものでも十室はあつたが、ただ宗派とはなつていなかったようである。この十室のあるものが、この時代になると各々宗派となつて確定しつつあつたことが記されている。即ち、都序の時代の互の相攻撃が、この時代になると、その師、その弟子達まで判るようになって、従つて、それらの師弟に対する評が下されている。先ず、各宗派及び師については次のような記載がある。

逮其德山林際瀉仰曹洞雪峯雲門等各有門庭施設高下品提。

至に相継子孫護宗党祖不原真際。竟出多岐矛盾相攻縮白不辨。

論曰。凡為宗師。先辨邪正。邪正。邪正既辨。更要時節分明。又須語帶宗眼。機鋒酬對各不相辜。然雖句裏無私。亦仮言中辨的。曹洞則敲唱為用。臨濟則互換為機。韶陽函蓋截流。馮仰則方圓默契。

且如曹洞家風。則有偏有正。有明有暗。臨濟有主有賓。有体有用。然建化之。不類且血脈而相通。無一不該。

それらの宗派の内に、或はそれらの宗派以外の内に、師に房わしくない師がいたのであろう。それらを諫めて文益は論評している。

近代宗師失。抱學者無稽。用我。以爭鋒。取生滅。為所得。接物之心安在。破邪之智蔑聞。棒喝亂施。自云。曾參德嶠臨濟。円相互出。惟言。深達馮山仰山。對答既不辨綱宗。作用又焉知要眼。誑謔群小。欺昧聖賢。誠取笑於傍觀。兼招尤於現報。

夫欲舉唱宗乘。提綱法要。若不知於血脈。皆是妄称異端。（中略）多見不量。已力剩竊人言。但知放而不知收。

但知急務^⑨住持^ニ濫称^ニ知識^ニ且貴^ニ虛名^ニ在^ニ世。寧論^ニ襲^ニ惡^ニ於身。不^ニ惟^ニ襲^ニ警後人。抑亦獨^ニ弊風教。

宗と宗師を論評して、次に弟子についてもその心得を記している。

夫^⑩為^ニ參學^ニ之人^ニ既入^ニ叢林^ニ。須^ニ摺^ニ善知識^ニ次親朋友^ニ。知識要^ニ其指^ニ路朋友貴^ニ其切磋。

學般若人不^レ無^ニ師法^ニ。既得^ニ師法^ニ要^ニ在^ニ大用^ニ。(中略)可^レ行即行。理事俱脩。當^ニ用即用。

近代之人多^レ所^ニ慢易^ニ。叢林雖^レ入^ニ傾^ニ幕^ニ參求^ニ。縱或留^ニ心不^レ摺^ニ宗匠^ニ。邪師過謬同失^ニ指歸^ニ。未^レ了^ニ根塵^ニ輒有^ニ邪解^ニ。入^ニ他魔界^ニ全喪^ニ正因^ニ。

或は、又、師弟の中には、文益が第十条、己の短を護つて好んで勝負を争う、の中で論評しているような輩がいたことも事実であろう。即ち、

蓋有^⑪望^ニ風承嗣竊^ニ位住持^ニ。便為^ニ我已得^ニ最上乘^ニ超世間法^ニ。護^ニ己之短^ニ毀^ニ人之長^ニ。誑惑^ニ於^ニ鄭蠶^ニ咀囃^ニ於^ニ屠販^ニ。声張^ニ事勢^ニ矜託^ニ弁才^ニ以^ニ訐露^ニ為^ニ慈悲^ニ。以^ニ佚濫^ニ為^ニ德行^ニ。破^ニ弘禁戒^ニ棄^ニ僧威儀^ニ返^ニ淩鑠^ニ於^ニ二乘^ニ倒^ニ排斥^ニ於^ニ三學^ニ。

故に、文益は第三条に次のことを載せたと考えられる。

不^⑫見^ニ雲門大師道^ニ。尽^ニ大唐國內^ニ覓^ニ箇^ニ善話人^ニ也難^ニ得^ニ。又不^レ見^ニ黃檗和尚道^ニ。馬大師出^ニ八十余員^ニ善知識^ニ。問者箇箇^ニ阿碌碌^ニ地。惟有^ニ盧山和尚^ニ較^ニ些子^ニ。

「宗門十規論」の教訓(長 嶋)

しかしながら、文益は師資のお手本は次のようであり、又、師資の道を択ぶことは尤も難し、と論評している。

且^⑬如^ニ天下叢林^ニ至盛^ニ。禪社極多聚^ニ衆不^レ下^ニ半千^ニ。為^ニ法況^ニ無^ニ一二^ニ。其間或有^ニ抱道之士^ニ潔行之人^ニ。肯暫徇^ニ於^ニ衆情^ニ勉力紹^ニ於^ニ祖席^ニ。會^ニ十方之兄弟^ニ建^ニ一處之道場^ニ。朝請暮參^ニ匪^ニ憚^ニ勞苦^ニ。且欲^ニ統^ニ弘慧命^ニ引^ニ道初機^ニ。非^レ為^ニ治^ニ激声名^ニ貪^ニ禁利養^ニ。如^ニ鐘待^ニ扣^ニ遇^ニ病与^ニ医^ニ澍^ニ法雨^ニ。則大小無^レ偏振^ニ法雷^ニ則遠近咸^ニ応^ニ其榮枯自^ニ異動^ニ蠶差乖^ニ。固非^ニ選^ニ摺^ニ之^ニ情行^ニ取^ニ捨^ニ之法^ニ。(中略)遇^ニ般若之緣^ニ非^レ小。摺^ニ師資之道^ニ尤難^ニ。能自保任^ニ終成^ニ大器^ニ。強施^ニ瞑眩^ニ甘受^ニ謗嫌^ニ。同道之人幸宜助^ニ發^ニ。

それでは、師資としての本質の基礎がどこにあつたかと言えば、文益が序で記載しているように、次の点にあると考えられる。

而況^⑭祖派瀚漫^ニ南方最盛^ニ。於^ニ焉達者罕^ニ得^ニ其人^ニ。然雖^ニ理在^ニ頓明^ニ事須漸証^ニ。門庭建化固有^ニ多方^ニ。接物利生其掃^ニ一撥^ニ。苟或未^ニ經^ニ教論^ニ難^ニ破^ニ識情^ニ。

右のことより、当時、教典に精通することなく、妄りに教典を引用する者多く、従つて、文益は第八条、教典に通ぜず、乱に引証あり、の中で次のように論評して言う。

凡^⑮欲^ニ學^ニ揚宗乘^ニ援^ニ引教法^ニ。須是先明^ニ弘意^ニ次契^ニ祖心^ニ。然後可^ニ學^ニ而行較^ニ量疎密^ニ。儻或不^レ識^ニ義理^ニ。只當專守^ニ門風^ニ如^ニ輒妄有^ニ引証^ニ。自取^ニ譏誚^ニ。且如^ニ脩多羅藏^ニ尽是^ニ指^ニ蹤^ニ。蹤^ニ円頓

「宗門十規論」の教訓（長 嶋）

上乘悉同標目。仮使解得百千三昧沙數法門只益自勞。非レ干他事。況復會權帰実摂裔還源。

そのことは教典に精通し、理道に達して、初めて歌頌が作れるのであるが、文益時代の僧の内には、第九章の題目になつてゐるように、声律に閑せず、理道に達せず、好んで歌頌を作つていた僧がいたのであらう。又々論評して言うのである。

総揚二大事之因縁共讚諸仏之三昧激昂後學一諷刺先賢。

皆主意在レ文焉司妄述。稍親諸方宗匠參學上流以歌頌為等閑。將製作為末事。任情直吐。多類於楚談。率意便成。絶肖於俗語。自謂不拘羈縻。匪沢穢穢。擬他出俗之辭。標帰第一之義。職者覽之嗤笑愚者信之流伝。使名理而寢消累教門之愈薄。〔中略〕苟或乏於天資。當自甘於木訥。胡必強攀英俊。希慕賢明。呈醜拙以乱風織弊訛而貽戚。無惑妄誕以滋後羞。

抑々、歌頌とは何であるかを文益は同じく第九条で論じている。

宗門歌頌。格式多般。或短或長或今或古。仮声色而顯用或托事以伸機。或順理以談真。或逆事而矯俗。

そして、その好例として、同じく第九条で次のように言うのである。

不見華嚴万偈祖頌千篇俱爛漫而有文。悉精純而靡雜。

右を総合して考察する時、「宗門十規論」の教訓は次のことを暗示しているのである。即ち、第二条、門風を党護し、議論に通ぜず、に於ける次の論旨である。

祖師西来非為有法可伝以至于此。但直指人心見性成仏豈有門風可尚者哉。

ここで論じている意味は、人から人に伝える法があるのではないと言うのである。しかし、それともう一つ別の考察をするなら、その時代は恵能示寂（七一三年）後、二百年は過ぎてはいるが、当時というのは、現代のようにテンポの速い時代ではなかつた筈である。百丈、宗密にさほど遠くなく、実際に禅宗の發達を見るのは、「禅源諸詮集都序」が、

即勸坐禪。禅菴羅列遍於嚴壑。

因此便有一類道士儒生閑僧汎參禅理者。

と示すように、この「宗門十規論」の書かれた時代の約百五十年前あたりからで、馬祖の弟子達の百丈（720-814）、南泉以後である。ということは、完全に恵能以後であつて、この祖師西来非為有法可伝以至于此、の意味するものは、達磨以後ではないという証拠の一部にはならないであらうか。又、祖師西来云々はその意味も含むように考えるが、どうであらうか。その点に關しては宗密も、又、「禅源諸詮集都序」の中で、

六代禅宗師資伝授禅法。皆云。内授密語。外伝信衣。衣法

相資^レ以為^レ符印^一。曹溪已後不聞^レ此事^一。未審今時代人説^レ密語^一否。不説則所^レ伝者非^レ達摩之法^一。説則聞者尽合^レ得^レ衣。

と記載し、疑問を投げかけているのである。宗密の場合、惠能以後時代的にあまり隔たりのない時代の証人となるように考えられる。そして、この「宗門十規論」の文益も、又、重要な証人であると考えることができよう。何故なら、文益でさえ、何ら抵抗なく、伝説とも思われる「壇經」に於ける惠能と明上座の会話を記しているからである。即ち、第七条、露布を記持し、時に臨んで妙用を解せず、の中に次のように記している。

⁽²⁵⁾ 六祖又謂明上座云。吾与汝言皆非密事。密在汝辺。

捏造が、或はそれによる伝説が史実となる程、禪寺内で繰返されていたのである。しかしながら、次のことは敢えて加筆したい。即ち、禪宗は達磨から起つたのでもなければ、惠能から起つたのでもない、唯、禪宗は惠能以後に、壇經が書かれた以後に発達してきたということである。

宗密の著わした「禪源諸詮集都序」の時代(八三〇年代)には、未だ、宗派となつていない禪宗が、この「宗門十規論」の書かれた時代(十世紀前半)になると宗派となつて確立し、従つて宗派の師、その弟子までも判然としている程、禪宗は発達していた。しかも、それらの宗派は、未だ、お互いに相争つてはいるが、そのことよりも、禪教を行行者として、師

に房わしくない者、或は弟子に相当しない者が大勢出現していたことである。それらの中には、拙劣な歌頌をつくり、經典祖録の内容も判らずに、妄りに引用して説法している者がいたのである。即ち、この時代は、正に禪宗の爛熟期で、文益が禪家の質の低下を論評し、戒めているからである。そして、なお文益は、宗派や門風に尊ぶべきものがあるのではなく、或は又、正師、正弟子の理想像を論述しながらも、法の伝えるものがあるのではない、唯、直指人心、見性成佛あるのみである、と論述しているのである。

最後に、禪門に於ける重要な古典の一つであるこの「宗門十規論」は、千年以上経過した今日も、なお、出家していない、在家の我々にも適用され、自他共に恥ぢ、且つ相警めなければならぬことを説示している。更に言い更えるなら、筆者にも恩師佐藤信衛博士があり、恩師の指導のもとに、学会にて論文を発表してはいるが、果してこれでよいのかと自問し、自らを恥じ、戒め、なお、論文の書き方における正しい方法を学ばねばならないと改めて自問する次第である。

1 大正蔵48、四〇〇頁中「禪源諸詮集都序」
2 注2より注21まで、及び注25は、続藏經第一輯第二編第十五套第五冊「宗門十規論」

22 大正蔵48、四〇一頁中「禪源諸詮集都序」
23 大正蔵48、四〇二頁下「禪源諸詮集都序」
24 大正蔵48、四〇一頁上「禪源諸詮集都序」